

テーマ

建築の再生・活用を課題とした環境デザイン教育



キーワード：建築 再生 活用 転用 リノベーション

○活動に取り組んだきっかけ・背景

建築でサステナビリティ（持続可能性）を高める方法として、今ある建物を長く使うことが挙げられます。特に日本では人口減少の中で空き家が増えていることが示すように、既存の建物が余っています。今ある建物を再生・活用（リノベーション）し、積極的に使い続ける価値観が広まることがSDGsにつながると考えられます。

○活動の目的

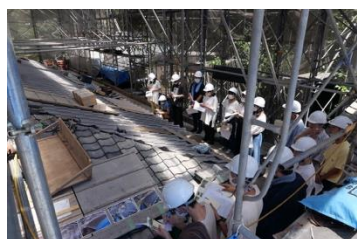
リノベーションとは、古い建物にしかない価値を活かして、積極的なデザインとすることです。現在の機能や用途に合うように、必要に応じて改修、構造補強、設備更新等を行います。そのためには古い建物のどこにどのような価値があるかを知り、どこをどのように改修すべきか考える必要があります。

○具体的な内容

造形学部環境デザイン領域の授業では、継続的にリノベーションの課題に取り組んでいます。これまで、1) 掛川市の旧山崎家住宅「松ヶ岡」、2) 富士市吉原の防災建築街区の共同ビル、3) 静岡市草薙駅前の立体駐車場など、様々な建築物を取り上げてきました。1) では幕末から明治期に形成された大規模木造住宅を文化財として保存しつつ、市民や観光客に親しまれる施設とするための提案、2) では1960-70年代につくられた鉄筋コンクリートの建物を転用する提案、3) では駅前の立地を活かして魅力的な施設とするための活用法を考えました。いずれも管理する自治体、日常の手入れをしている方々、ビルオーナー、修理工事の建設会社等と連携して、現地調査、関係者からのレクチャー、先行事例の見学等を交えて授業が展開されます。最後には公開講評会やパネル展示などを行います。

○期待される効果など

古い建物のキズや汚れは、見方を変えれば、使われ続けてきたことによるデザインであり、そこ、その物にしかないユニークな価値になります。転用によってかつて必要だった空間や設備に新たな役割が与えられることは、予期しない出会いを生みます。これらは新築の建物には決してない、時間がつくる物語であり生活の記憶です。リノベーションは面白い、という価値観が広まることを期待します。



1) 「松ヶ岡」修理見学



2) 富士吉原の現地調査



3) 公開講評会

土屋 和男
造形学部・造形学科
教授

連携先
掛川市、飛鳥工務店、京都伝統建築技術協会
富士山まちづくり株式会社、静岡市ほか